

くらしナビ 生活スタイル

オーガニック化粧品を選ぶ

消費者の安全志向や環境に配慮したライフスタイルへの変化などを背景に、オーガニック化粧品が近年人気を集めている。一般的な化粧品よりも、品質や製造工程が肌や自然に優しいとされているのが特徴だ。オーガニック化粧品とはどんなものか、認証の特徴や選ぶ際の注意点を調べた。

●海外の認証目安に

オーガニックとは、農薬や化学肥料を使わない有機栽培のことで、農産物に対して使われてきた言葉。有機栽培の農産物には、農林水産省が認めた機関が検査した上で「有機JASマーク」が表示されている。このためオーガニックかオーガニックでないかは一目で判別できる。有機JAS認証を受けずに「オーガニック」などと表示することは日本農林規格(JAS)法で禁じられている。

オーガニック化粧品は、本来は有機栽培の植物を原料としたものを指すが、農産物のように国が関与した認証はない。仮に有機植物原料が1%しか配合されていなくても、オーガニック化粧品として販売できるのが現状だ。化粧品



オーガニック化粧品を豊富にそろえる伊勢丹新宿本店の「ビューティーアポセカリー」
—東京都新宿区で

「エシカル」背景に市場拡大

矢野経済研究所(東京都中野区)の2012年の調査によると、自然派・オーガニック化粧品の市場規模は07年度の734億円から年々拡大し、11年度は930億円、12年度予測は987億円だった。エコロジーやロハスなど、エシカル(道徳的)な消費行動が好まれるようになったことが背景にあるという。

04年からオーガニック化粧品を主に販売している専門店「コスメキッチン」はここ数年で事業規模を急拡大し、現在全国に25店舗を構える。運営するマッシュビューティーラボ(渋谷区)販売促進部の福本敦子さんによると、「昔は菜食主義者など一部の健康意識の高い人が商品を購入していたが、最近では一般にも浸透してきた。妊娠や出産を機に体や環境に良いものを求めるようになった女性が多い」と話す。

有機食品に準じたオーガニック化粧品の認証マーク例

主な認証条件	
	・収穫前に3年以上、農薬や化学肥料を使っていない土地で栽培されたオーガニック原料を使っている
	・水と塩分を除いた重量の95%以上がオーガニック原料
	・原料の95%以上がオーガニックで、残りの5%も農作物またはオーガニックでない天然農作物であること
	

※日本オーガニックコスメ協会による

認定オーガニックの二つ。ともに約115カ国の710団体以上が加盟する国際有機農業運動連盟(IFOAM、本部・ドイツ)がオーガニック食品について作った世界統一基準に準じている。

●食品同様厳しく

日本でも、民間では食品に準じたオーガニック化粧品認証の動きはある。有機JAS認定機関であるNPO法人「日本オーガニック&ナチュラルフーズ協会(JONA、東京都中央区)は、有機食品に加えて、一昨年から化粧品の認証も始めた。同協会の清水美紀さんは「海外の認証は動物由来成分の使用を禁止していることが多いが、日本では馬油など伝統的に化粧品に利用しているものがある」と日本の事情に触れ、「食品利用の副産物であることを条件にするなど、日本に合わせた基準にした」という。これまで

●成分表示に注意を

1980年、当時の厚生省は化粧品メーカーに対し、肌トラブルを招く恐れがある102の成分の表示を義務付けた。主に石油から合成された界面活性剤や防腐剤、保存料で、2001年からはこれら102の成分以外も含めた全成分表示が義務付けられたため、旧表示指定成分と呼ばれる。水上代表によると、欧州の認証団体の中には、この旧表示指定成分の使用を一

部認めている団体もあり、認証があっても100%オーガニックとは言えないという。水上代表は肌に合わない化粧品を使い続けたことで、30代のころ、顔の皮膚が黒く色素沈着するリール黒皮症に苦しみ、完治するまで5年以上かかった。その経験から、成分に徹底的にこだわるようになったという。「全成分表示を読むことは大変かもしれないが、読んだだけでイメージしにくい化学的な表示があった場合、疑問を持って自分で調べてみることも必要」と話す。日本オーガニックコスメ協会のホームページ(english.jp)では「化粧品成分辞典」など成分についての解説を掲載している。

【野村房代、写真も】